
ね

るうね

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ね

【Nコード】
N52430

【作者名】
るつね

【あらすじ】
愚痴です。不快になりたくない人は回避した方が良いかと。

不定期連載

強い言葉

「ね」

「うん？ なに」

「最近、やたらと強い言葉を使う人が増えたよね」

「強い言葉？」

「『馬鹿』とか『死ね』とか『バルス』とか」

「最後のはともかく、たしかにそうだね」

「なんで、そんな言葉を使うんだろうね」

「んー」

「馬鹿って言う方が馬鹿なんだ、って格言があるじゃない」

「格言かどうかはともかく、あるね」

「あれってさ、『馬鹿』なんて強い言葉を簡単に使えてしまう思慮の浅さを指摘したものだと思うんだ」

「そうかもね」

「相手がそれを聞いて（読んで）どう思うか、考えないのかな。それとも考えた上で使ってるのかな。だとしたら最低だけど」

「ふーむ」

「最近の風潮でさ」

「うん」

「強い言葉を使う 正しい意見、みたいなのところがあるじゃない」

「あー、あるね」

「声が大きければ、それが正論に聞こえる、っていうかさ」

「思うにね」

「うん」

「そういう強い言葉を口にする人は、弱いんだよ」

「そうなの？」

「弱いから、自分の意見の正しさが確信できない。そうした自分の弱さを隠すために、強い言葉を使ってるんじゃないかな。意識的に

かどうかは分からないけど。実際、そういう人を見てると、他者をかなり強い言葉で非難しているわりに、自分がそういう言葉を向けられるのを人一倍恐れているように見えるよ」

「自分が強い言葉を使うのはいいけど、自分に使われるのは嫌だ、って？　ずいぶんと勝手な話」

「だね。少なくとも、創作者たる自負がある以上は、言葉の強弱に敏感になって、使用する時には細心の注意を払うべきだと思うよ」

「まったく、強い言葉を安易に用いる馬鹿は死ねばいいのに」

「うわ、台無しだあ」

注文の多い創作者

「ね」

「うん？ なに」

「最近、読者　というか、その感想の書き方に関して注文が多い創作者が増えてきたよね」

「あー、見かけるね。もっと思いやりを持って感想を書け、みたいな」

「不用意に厳しい感想を書いて、作者が傷つき小説を書くのをやめてしまつたら、どうするんだー」

「ははは」

「まあ、別にそう思うのは勝手だけさあ」

「あんまりにも注文が多すぎる、と？」

「うん。でさ、そういう注文の多い作者ほど、自己の作品に対する批判を許容できない傾向がある気がする」

「たしかに」

「もちろん、明らかな誹謗中傷の類は論外だけさ。最近は、ただ厳しめの感想にすら拒絶反応を起こす作者が多い気がするんだ」

「そういえば、この前、ある作品の感想欄で見かけたんだけど」

「うん」

「感想のうちの一つで、全体的には褒めてたんだけど、最後に少しだけ作品の問題点を指摘してたものがあつたんだ」

「うんうん、それで？」

「作者が返信で、数行に渡って、指摘された部分に対して言い訳と反論」

「うわぁ……」

「そこは、これこれこういう意図で書いたんです。だから、その読み方は間違っていますよ（意識）」

「読者の読み方にケチをつけるって……は、恥ずかしくないのかな、

「創作者として」

「作者がどんな意図を持って書いていようが、読者にはそんなこと全く関係ないのよね。読者が感じたことが全て。書かれた感想や指摘を受け入れるかどうかは作者の自由だけど、読者の読み方に異を唱えるのはまずいよね」

「その感想を書いた人も災難だね。もう感想を書こうという気にならなくなっちゃうんじゃない？ 読者が傷つき、感想を書けなくなったら、どうするんだー」

「ははは」

「小説に限らず、あらゆる創作物は、『発信者』と『受信者』の双方がいないと成立しないものね。どちらか一方に過剰な要求をするのは、いかななものかと」

「少なくとも、作者が感想を選び好みするような態度を見せるのは、いただけないよね」

「うんうん。さて、そろそろ食事時だね。今日はどこで食べる？」

「あ、それなら僕がいいお店を知ってるよ。ちよっと客に対して注文が多い店なんだけど」

「え、それって」

作者と作品

「ね」

「うん？ なに」

「時々、作者と作品は別物だから、分けて考えて欲しい、みたいなことを言ってる人がいるけど……」

「いるね」

「無理でしょ」

「無理だね」

「たとえば、わたしなんかは北方謙三の作品が好きだけど、彼自身は好きじゃないんだよね。エッセイなんかに見られる、物の考え方とか。だから、彼の小説を読む時には、人格とか気にしないようにしようと思っではいるんだけど、そうしたことが頭をよぎって、純粹に楽しめないこともしばしば」

「接点が少ないプロの小説家にしてそうなんだから、いわんや交流が容易で人格が表出しやすいネット作家においておや、だね」

「ネットでの人格がそのままリアルの人格でないことは百も承知だけど、じゃリアルでの人格がどうかなんてことは分かりようがないよね。結局は、その人の書く文章から推し量るしかない」

「それなのに、作品と作者は別物デース、ボクが何を言っても、作品を色眼鏡で見ないでね　とか言われてもねえ」

「前回書いた『読者に対する過剰な要求』につながるものがあるかな」

「思うにさ」

「うん」

「予防線なんじゃないかな。作者と作品をうんぬん、と主張する人に限って、やたらと強い言葉を使って悦に入ったりするし」

「そうした言動を取ることによって、読者が減ることを恐れてるってこと？」

「多分ね。意識してやってるのか、無意識なのかは知らないけど」
「根性ないなあ。そんなこと気にするぐらいなら、毒を吐かなきゃいいのに」

「まったくね。僕たちも、こんなこと話してる時点で、ある程度のこと覚悟してるし。多分、これを読んで離れていく読者も、けっこういると思う」

「でもさ」

「うん？」

「離れるほど、もとの読者がいないんじゃない？」

「それを言っちゃあ……」

長期連載停止中

「ね」

「うん？ なに」

「長期連載停止中の作品について、どう思う？」

「うーん、難しいところだね。長期連載停止中、と言っても、十把一からげにはできないし。いくつかに分類する必要があると思うよ」

「たとえば？」

「まず、作者が何らかの理由で書くことができない状態にある場合、極端な話、死亡したりとか」

「病気で長期療養中とか、会社の仕事が忙しくなったとか？」

「そうそう。あとはメンタル的な問題もあるかな。近親者が亡くなった人が、コメディーマンかを連載していたとしたら……」

「ああ、それは書けなくなりそう」

「次に、単純に書く気がなくなった人。趣味で小説を書いてた人が、もっと他に興味のあることを見つけて、そのままフェードアウト」

「うーん、それはちよつとアレだね」

「で、最後に、他に書きたい小説のネタを思いついて、そちらを優先、結果的に、古い小説は放置、みたいな人。『小説家になろう』で、一番多いのが、このタイプじゃないかな」

「よく、新連載を連発している人を見かけるもんね」

「うんうん、書くことができない人はともかく、他の二つのタイプの人は、まあ非難されても仕方のない部分はあるよね」

「そうだねー。けしからんですな、プンプン」

「はい、それじゃ、今回のテーマについては、これで終わりということ」

「とはいかないんだな、これが」

「え？」

「今回、わたしが言及したいのは、非難する側なんだよ」

「どういうこと？」

「やたらと長期連載停止中の作者を非難して、時には人格否定までしているような人を見かけるけどさ。あれってどうなの？」と

「あー、まあいき過ぎた非難してる人が、けっこういるよね」

「よく、プロでもアマでも自分の書いた作品には責任を持つべきだ、という論調があるけど」

「うん」

「ぶっちゃけるよ？」

「どぞ」

「所詮、綺麗ごとでしょ、そんなの」

「はい、今のところカッター」

「テレビじゃないから」

「ぶっちゃけすぎでしょ」

「いや、だつてさあ、お金もらって書いてるならともかく、趣味で書いてるわけじゃん。建前はともかく、現実問題として書く気がなくなつたから、やーめた、つてのがそんなに悪いこととは思えないんだよ。楽しみにしていた読者を裏切る行為だ、というのも分からないではないけど、んじゃ、読者の方は作者に何を与えていたのかな、と」

「読者が作者に与えるもの……感想とか？」

「それも含めて、作者の楽しみになるようなこと。わたしは、作者と読者は対等の関係にあると思ってるから。少なくとも、趣味で書かれている小説に関しては」

「一方的に楽しみを享受するだけでは、不公平だと言いたいんだね？」

「そうそう。たとえ批判的な感想でも、しっかり読まれてるな、と作者が感じれば、次への活力につながると思うんだ。そうしたこと、作者に楽しみを与えなかった読者（仮）が、作者を手厳しく非難するのは、どうにも違和感がある。ましてや、作品を読んでもいなかった『部外者』が、作者の人格否定までしているのを見ると、

「なんだかなあ、と思うよ」

「長期連載停止中の作者を非難する人は、まず己を顧みよ、ということだね」

「まあ、完結した駄作と完結しない名作では、前者の方が価値があるというのは間違いないところなんだけどね」

「あ、最後に綺麗ごとでしめた」

読者を馬鹿にすることの危険性

「ね」

「うん？ なに」

「『小説家になるう』のランキングなんだけど……」

「あー、ついにその話か」

「なんか似たような話が並んでるよね」

「異世界、ファンタジー、チート、ハーレム……まあ、ランキングを狙うなら、これらの要素を盛り込むのが常道だという意見が多いね。で、今日は、そのことについて物申すわけ？」

「いや、それ自体はどうでもいいと言うか、あまりランキングに興味ないし」

「それじゃ、なにさ」

「この前、ランキングに関連して読者を馬鹿にしてる作者を見かけたんだよ」

「あれま。具体的には、どのような？」

「自分の作品はランキングに載っている作品よりも面白いという自負がある。そんな自分の作品が評価されないのは多くの読者が、異世界チートハーレムファンタジーを好むような馬鹿ばかりだからである。（意識）」

「ふむふむ」

「これって、どう思う？」

「うーん、どうだろうね」

「わたしはさ、安易に読者を馬鹿にするという行為は、創作者としての死につながると思うんだよ」

「読者が馬鹿だと断じてしまえば、創作者としてそれ以上の成長は望めないもんね」

「そうそう。あらゆる問題を読者に転嫁できてしまうから、作者は自分の側にある問題に気付けない。結果、それ以上は成長できず、

最終的には、いくら書いても同程度のものしか書けなくなる。それ
って、創作者として死んだも同然だよな」

「読者を馬鹿にすることで、自分が馬鹿になるわけだ。こりゃ、笑
えない冗談だね」

「もちろん、どんな読者にも敬意を払えとは言わないけどさ、あか
らさまに読者を馬鹿にすることの危険性は認識してほしいよ」

「そうだねえ。創作という非常にデリケートな作業をする人間なん
だから、そのあたりには細心であるべきじゃないかな」

「考えが足りないよね。まあ、深く考えないからこそ、簡単にそう
いうことができてしまうんだろうけど」

「そもそも、読者を馬鹿にする時点で心に余裕がないと言うか。本
当に自分の作品が面白いと思っているなら、泰然としていてほしい
ものだね。細かいことに一喜一憂するのは、自分に自信のない証拠」

「うい。たとえばお気に入りじゃなくても、感想がゼロでも、評価
がゼロでも……」

「ごめん、ちょっと泣いていいかな？」

個人的な意見です（笑）

「ね」

「うん？ なに」

「時々、自分の文章に対する反対意見に、これは個人的な意見なので反発するのはおかしい、とか書いてる人がいるけど」

「あー、いるね」

「甘いよね」

「甘いねえ」

「ネットの現実を理解してないと言うか。夢見がちな子猫ちゃんかと。衆目に晒した以上、どんなに穏当な意見でも、常に反発される危険性はあるのにね」

「ましてや反発を招きやすい意見を書いておきながら、『これは個人的な意見なんです』の一言で済むと思ってる、その神経が分からない。水戸黄門の印籠じゃないんだから」

「印籠はいいね。たしかに、実際に反発されたら、この紋所が目に入らぬか、とばかりに『これは個人的意見です』という言葉を持ち出してくるからなあ」

「あれだね、なんとかの一つ覚え」

「大体、その反発している側だって、『個人的な意見』を述べているだけで押しつけているわけじゃないのに。個人的意見に反発するのはおかしいおかしい言っておきながら、自分が反発してりゃ世話ないよ」

「たしかに、個人的意見という言葉は緩衝材にはなり得るけど、それ以上のものではない。万能の防御壁ではないことを自覚してほしいね」

「その自覚もなしに不用意な言葉を吐く、というのはどうなんだろう？ 読者の寛容さに期待し過ぎ。甘えていると言ってもいい」

「うんうん。さて、じゃ、×ようか。今回の×の言葉は、やっぱり

「これでしょ」

「ここまで書いてきたことは」

「あくまで個人的な意見で、押しつける気はアリマセーン」

天賦の才

「ね」

「うん？ なに」

「自分よりはるかに面白い小説を書いている人を見ると、ちょっと凹むよね」

「たしかに」

「やっぱり、天賦の才ってあるのかな」

「あるよ。少なくとも、広義に解釈した場合の天賦の才は」

「おおお、あつさり言うね」

「だって、事実だからね。たとえば、まともな教育が受けられず、文字を読み書きできない人に小説が書けるかな？ もっと極端な話をすれば、乳飲み子の時に虐待を受けて死んでしまったら、小説は書けないよね。そうした人たちからすれば、小説を書ける人は天賦のものに恵まれていると言えるでしょ？ そういった環境の差も、広義に解釈すれば、天賦の才と言えるのではないかと。運も実力のうち、ではなく、運も才能のうち、と言うか」

「じゃあ、もつと狭義に、持って生まれた個人の能力の差、という意味での天才は？」

「うーん、これは難しいけど……ある可能性が高い、というところかな」

「高いんだ」

「スポーツの分野、たとえば短距離走なんかは、それに向いた遺伝子配列とかが、すでに発見されているらしいからね。小説家に向いた遺伝子配列なんかも、そのうち発見されるかもしれない」

「ふーむ、なるほど」

「ま、やっぱりスポーツと芸術ではいろいろと違ってくるだろうから、確実にあるとは言えないけどね」

「もし、小説家に向く遺伝子配列があつたとしても、わたしにはそ

れがないんだろうな……なんか落ち込むよ」

「はい、ストップ」

「？」

「たしかに、天才という言葉を持ち出すしかないほどの能力の差というものはあるよ。だけどさ、スポーツと違って、それは『差』と呼ぶべきものではなく『区分け』と呼ぶべきものなんじゃないかと思っんだ」

「『区分け』？」

「うん。要は、フィールドが違うってこと。天才には天才しか書けない小説がある。そして凡才には凡才しか書けない小説があるんだよ。凡才に天才の書く小説が書けないように、天才には凡才が書く小説は書けないんだ」

「世界一のフランス料理のシェフでも、お寿司は握れない、みたいなことかな」

「珍妙な例えだけど、その通り。スポーツと違って、小説は優劣がはつきりしないからね。まあ、プロの場合は販売部数や何やらで比較はできるけど、小説の面白さって数値化はできないでしょ」

「個々人の嗜好によるものだね。百人中一人しか楽しめなかった小説が、百人中九十九人が楽しめた小説より価値がないとは言えないわけで」

「だから、凡才は凡才なりの小説を書けばいい。一番まずいのは、安易に才能という言葉を使って、努力を放棄することだと思うよ。」

「この場合の努力というのは、天才に追いつく努力ではなく、自分の世界を創り上げる努力だけだ」

「うーん」

「なに、まだ納得いかない？」

「いや、特に異論はないんだけど、綺麗な言葉が並び過ぎてて、落ち着かないというか」

「ま、たまにはいいんじゃない？」

伝家のなまくら刀

「ね」

「うん？ なに」

「今日のキーワードは『嫌なら見なければいい』なんだけど」

「ああ、それね。伝家の宝刀ならぬ、伝家のなまくら刀パート2」

「よくいるよね、ちよっと作品や意見に批判的な反応が返ってきたら、『嫌なら見なければいい』って言う人。何と言うか、自己中もあそこまでいくと、いつそ清々しいね」

「どんだけ、世界はお前を中心に回ってるのかと。いくら避けようとしたって、その作者が他の人の感想欄なんかに出没して、同じ言説垂れ流してたら避けようがないだろうに」

「これまで何度も指摘してきた読者に対する過剰な要求だね、『嫌なら見なければいい』ってのは。作者側は何の努力もせずに、読者にばかり要求を突きつける」

「どうしても読者を選別したいのなら、作者の側でも努力が必要だよね。たとえば自分でサイトなりなんなりを作って、そこで同好の士を募ればいい。実際、そういうことをしている創作者だって何人もいるし」

「なんで、そうした努力をせずに、衆目に晒されることが前提の『小説家になるう』に居続けるんだろう」

「思うにね」

「うん」

「単純にめんどくさいからだと思うよ。そこまでして、創作活動が続けようとは思わないんでしょ」

「その程度の気持ちだってことね」

「そんな中途半端な気持ちだから、自分の方が努力するという発想が浮かばず、読む側に対する要求だけが肥大していく。そういう作者に限って、自分は創作に対して真摯に向き合っていると思いき

でるから始末が悪い」

「『嫌なら見なければいい』なんて簡単に口にできてしまう時点で、己が創作というものに対して不実であると知るべきだよな」

「毀誉褒貶は創作につきもの。その現実を受け入れられないなら、自分が努力して自分好みの環境を整えるべき」

「それすらできない（やらない）なら、創作活動なんてやめちゃえば？」

「さて、じゃ、今回のメだけど」

「特に思いつかないので、このままフェードアウト」

「不実だ……」

一言感想

「ね」

「うん？ なに」

「そろそろ、この出だしも飽きてきたね」

「いや、僕に言われても……」

「まあいいや。今回のテーマは、えーと、『一言感想』ね」

「いわゆる、『面白かった』『つまらなかった』『死ぬ』という感想だね」

「まあ、最後のは別にして、全体的な傾向として、一言感想は、あまり良い印象を持たれないみたい。特に『つまらなかった』の一言だけというのは、嫌う作者が多いね」

「まあ、具体的にどこがつまらなかったか書いてくれた方が、作者としては助かるかな」

「ただ、感想を書くなら必ず役立つ感想を書け、という姿勢でいる作者もどうかとは思っけど」

「読者が身構えてしまうよね。これもまた、読者に対する過剰な要求の一例。気軽に作品が書けるのと同じくらい、気軽に感想が書ける、という雰囲気は重要だと思うんだ」

「うんうん」

「それにさ」

「それに？」

「一言感想だって、作者の努力次第で、『役立つ』感想になるんじゃないかな」

「どゆこと？」

「たとえば『つまらなかった』という感想を残した読者が、他にどんな作品に感想を書いているのかを調べてみたらどうだろう。その読者が『つまらなかった』、あるいは『面白かった』と感想を書き込んだ作品を読んでみて、共通点を探る。そうすることで、自身の

作品の問題点、改善点も見えてくるかもしれない」

「うーん、言ってることは分かるけど、けっこう大変そうだね」

「でも、作者はそれぐらい貪欲でいた方がいいと思うんだ。本当に小説が上手になりたいなら 真摯に創作に向き合おうとするからね」

「たしかに、一言感想は役に立たない、と決めつけて、現状に甘んじるよりは建設的かな」

「まあ、人それぞれやり方はあるから、これが絶対に正しいとはい切れないけど。せつかく読者が感想を残してくれたんだから、最大限活用しないともったいないよ」

「もし調べてみて、その読者が自分の作品にしか『つまらなかった』という感想をつけていなかったら？」

「その時は……さめざめと泣こうか」

傲慢なダブルスタンダード

「ね」

「うん？ なに」

「まず初めに新年の挨拶を。あけおめー」

「ことよろー」

「さて、挨拶も済ませたところで、本題。この前、すごいものを見た」

「南極大陸でストリーキング」

「……そこまですごくはない」

「ふむ。それじゃ、北極で」

「話、続けていいかな」

「どぞ」

「某所で見かけた意見んだけど、一作品読んだだけで批判的な評価を下すな、公開している全作品を読んでからにしろ（意識）」

「うは、そりゃすごい」

「なんつーか、もう痛々しいというか。人はどこまで傲慢になれるのかを試しているのかしらん？」

「ただ読者に過剰な要求をすれば気が済むんだろう。たとえば一作品でも、それを読んでくれた時間、感想を書いてくれた労力。決して、軽んじていいものじゃないよね」

「大体、そんな理屈でいくとすれば、作者がもらった感想に異論を述べるなら、その読者がどんな感想を残しているか、全部調べてからじゃないと駄目、ということになるでしょ。なぜかそういう話にはならず、読者側ばかり批判しているものだから。ヘソでコーヒーが沸いちゃうよ」

「見事なダブルスタンダード。ダブルスタンダード博物館に飾りたいくらいだね」

「そんな博物館があるのかは気になるところだけど」

「よくあれだけ自分に対して盲目的になれるものだと、逆に感心する」

「まあ、だからこそ、自分の意見がブレていることに気づかないんだと思うけど。自分の意見を客観的に見れないというか」

「それって作品でも同じことだよ。自分の作品を客観的に見れない。これは創作者として致命的だと思うんだけど」

「そうした意味でも読者からの意見、特に批判的な意見は貴重だと思うんだけどね」

「批判的な意見に真剣に向き合ってみて、これは違うな、と思えば捨てればいいことだし」

「取捨選択の自由。これを自在に行使できるようになることは、ネットのみならず、現実でも役立つからおすすめ。わたしもいろいろと捨ててます」

「必要なものも、いろいろと捨ててるけどね」

小説版モンスターペアレント

「ね」

「うん？ なに」

「また某所で面白い意見を見かけたので、紹介するね」

「ゲラゲラゲラ」

「まだ早い、まだ」

「失敬。続きを」

「ん。まあぐだぐだと書いてあつたけど、要約すると『感想を書く際には、作者の気分を害さないよう、最大限の注意を払うべきである』」

「ふーん」

「はいはい、鼻をほじらない」

「で、読者は自分の書く感想が作者の気分を害するかどうか、どうやって判断するの？ 作者の感想に関する許容量キャパって、一人一人違うと思うんだけど」

「なんか、作品の良いところを必ず見つけ出すとかうんぬん」

「これまた、非常に曖昧だね」

「いくら良いところを挙げたところで、少しでも否定的なことを書くとか、気分を害するキャパの低い作者さんもいるよね」

「そういう場合は、どうするのかね」

「その作者さんの言動を注視して、キャパを見極めた上で、感想を書けということじゃないかな」

「わざわざ？」

「わざわざ」

「傲慢だなあ」

「だねえ」

「そんなもの、気分を害した、書き方が悪いと作者が言えば、否定的な意見を封殺できてしまうじゃん」

「封殺したいんでしょ、本音では」

「多分、イニシアチブを常に作者側が握っている、という錯覚に陥っているんだろうね」

「作品を衆目に晒した時点で、その作品に関するイニシアチブはいったん読者に移る。読者がどんな感想を書こうが、書くこと自体を作者側から規制するようなことはできないし、すべきではない」

「作者にイニシアチブが戻るのは、感想を受け取った後だよ。別に全ての感想を真摯に受け止める、と言ってるわけじゃない。何度も言うように、取捨選択の自由があるんだから、それを行使すればいい。それが作者側のイニシアチブ」

「このイニシアチブを一時でも失いたくないというなら、作品を公開しないか、自分でそのような場を作るしかない」

「作品を公開した時点で、それはいったん作者の手を離れる、ってことを認識してほしいものだね」

「よく作品を我が子に例える作者がいるけど、はっきり言って親として過保護すぎ。いわゆるモンスターペアレントにしか見えない」

「まあ、気持ちは分からないでもないけどねえ。いつもべったりだと、さすがに見苦しい」

「千尋の谷に突き落とせとは言わないけどさ、もう少し子供を突き放してみても損はないと思うよ？」

「ういうい。さてと、それじゃ笑っていい？」

「どぞ」

「ゲラゲラゲラゲラ」

文字数制限小説

「ね」

「うん？ なに」

「今回は、文字数制限小説を取り上げるよん」

「文字数制限小説……というと、二百文字とか四百文字とか、字数を制限して書いている小説のことだね」

「そそ」

「一時期はいろいろと非難的になったりもしてたよね」

「そうねえ。まあ、わたしは批判も賛同もしないというスタンスではいるんだけど、ちょっと気になることが」

「なにさ」

「うん、文字数を制限して長編を書いている人がいるよね」

「あー、いるね」

「これは愚痴でも揶揄でもなく純粹に疑問なんだけど、なんでそんなことをするんだろう」

「ふーむ」

「これはわたしの持論なんだけど、ネタにはそれに適した文量というのがあると思うんだ。二百文字には二百文字の、長編には長編の、というように」

「なるほど」

「その適した文字数に足りないと、そのネタが活きないと思うんだよね。もちろん、それは逆でも同じことが言えるわけだけど」

「つまり、長編向きのネタに文字数制限をかけることは、あまり意味がない、どこか害になる可能性もある、ってことだね」

「小説を書く際に一番重要なのは、いかにしてネタを最大限に活かすか、ということでしょ。そういう意味では長編を書く際の文字数制限は、本来の文量（そのネタに適した文量）を使った場合に比べて、どうしても完成度が低くなってしまおうと思うんだよね。それは

よろしくないだろう、と」

「たしかにもつたいたないような気がするね」

「むろん、書く側はどんな作品でも自由に書けばいいとは思っけど、どうせ書くなら完成度の高い作品を読者に供したいじゃない？」

「そうだねえ。結論として、文字数制限をかける時は、そのネタが本当にその文字数で活きるのかどうか、慎重に見極める必要がある、ということだね」

「ネタを最大限に活かしても、つまらんものはつまらんけどね」

「そのセリフはオウンゴールのような……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5243o/>

ね

2011年3月7日12時11分発行